

給食の時間を少しでも 楽しみな時間にしてあげたい

こけぐち のりゆき
小ケ口 範之 さん



ここに書ききれないエピソードや写真は
当別町ホームページ「現代を生きる+」
でご覧ください。



今回は、北日本フードサービス株式会社に勤め、学校給食センターでチーフとして現場を指揮する小ケ口範之さんに話をお聞きしました。

私自身を育ててくれた給食

三笠市出身で、親の仕事の関係で小学6年生の時に太美に移住し、西当小、西当中、当別高校を卒業しました。高校卒業後は、町外に出て一人暮らしをしながら仕事をしていましたが、転職を機に当別町に戻り、再度の転職を経て12年ほど前から給食センターで勤務しています。

ここで勤務をする前は、接客業やデスクワークをしており、転職の際は、様々な業種の企業からお声がけをいただいていた。ただ、知人から給食センターで働いてみないかと紹介があり、私自身が当別町の給食で育った1人として懐かしさもあったので働いてみようと思い、現在に至ります。

給食センターでは

給食センターでは、調理や配膳、処理施設の管理をすることなどが

主な業務です。

調理は、一般の家庭料理と違って大量の食材を扱うので、煮崩れや味付けの難しさ、異物混入の防止など細心の注意が求められます。大変ではありますが、子どもたちの健康を支えるやりがいのある仕事だと思います。

とべっこランチにかける想い

栄養士が提案したメニューや味付けに従って調理するのが、私たちの仕事です。その中で、今年度から始まった月に1度のとべっこランチは特別なものです。地産地消の取り組みに携わる中で、子どもたちにも町で生産されている食材の美味しさを知るきっかけや、10月の給食で出たフィスクソツパなど、普段の給食では味わえない料理に触れるお手伝いになればと思います。

また、私自身も初めて聞く料理や町内で生産されている食材の新しい発見もあり、楽しみにしている日でもあります。

給食を食べる子どもたちへ

作っている調理員たちは、皆さ

んが給食を食べている様子は残念ながら見ることはできませんが、空っぽのスープの缶やおかずの容器を見ると「美味しく食べてくれたね」と嬉しくなります。特に、返却された食器などと一緒にお礼の手紙が添えられていた時は、とても嬉しかったです。

嫌いなものや苦手な料理もあるかと思いますが、調理員一同、心を込めて作っているので、美味しく食べてもらえると嬉しいです。

これからの目標

チーフになった時に決めた目標が「美味しい給食づくり」でした。実を言うと私は、給食が苦手な良い思い出がありません。私のような子がいるのであれば、少しでも楽しみな時間にしてあげたいのと、給食が好きなのはさらに好きになってもらいたい一心で、日々試行錯誤しています。

大人になった時、給食を思い返して「あのメニュー美味しかったな。こんなことあったよね」など楽しい思い出になるよう、これからも美味しい給食づくりを目標に、日々精進します。

とらべつ

歴史余話

第35回 当別移住前の物揚場付近

『新当別町史』編集担当

伊藤 哲也

古い地図を見ていると、思わぬ発見をすることがあります。北海道大学附属図書館の北方資料データベースで、「石狩町当別付近ノ図」（1871-1872年頃）を見ていた時のことです。石狩川の右岸に「伊達英橋物揚場」（英橋は邦直のこと）と記され、建物があるように描かれています。物揚場は移住に必要な物資を荷揚げする場所です。設置を申請したのは、1871（明治4）年4月でした。そこから赤い点線（図では星印）が「今般切開ノ新道」と記され、「山神社」という地点まで続いています。この山神社は現在の当別神社のことでしょう。

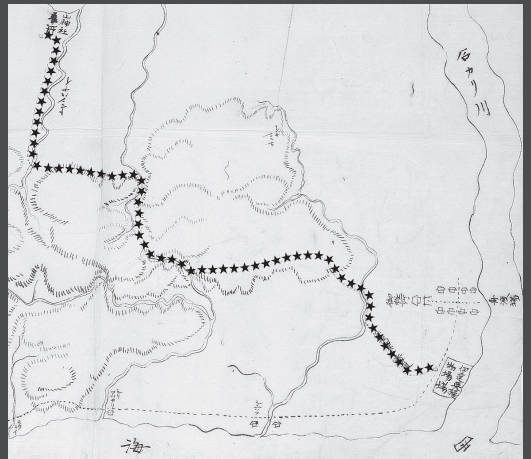
ところで、伊達邦直を筆頭とする当別への第2回移住者は、1872（明治5）年2月17日、故郷の岩出山を出発しました。苦難の航海を経て、3月15日に小樽港に着き、3月19・20日に石狩に到着しました（『当別町史』）。ここで「石狩」と呼ばれているのは、この地図の物揚場付近ではなかったかと思われます。というのは、当別町史は「荷船は更に遅れて24日、石狩へつた」としているからです。

地図をよく見ると、物揚場の少し上流に集落があります。大きな家（前に鳥居があります）があり、そこに「御役所」と読める文字があります。これは開拓使の石狩御役所のことです。そこから石狩川に向かって直線道路が描かれ、道路の両側に家が並び、さらに「舟渡場」（渡船場のこと）の文字があります。

ここには旅館や住宅があり、小さなまちを形成していたと思われます。ここで開拓使の倉庫建設を請け負ったのが、第1回移住で聚富に移り住んだ、

伊達邦直の家臣たちでした。当別町史によれば、明治4年5月に工事が正式に決まっています。これにより、邦直到着までの越冬資金を稼いだのです。

では、「今般切開ノ新道」は何のためのものだったのでしょうか。一つは倉庫の木材伐採のために必要な道であり、もう一つは当別への短縮ルートでもあったと思われます。すでに聚富から知津狩を経て当別へ行く道がありました（『当別町史』）ので、この道を新道と記したのでしょうか。物揚場からこの新道を通って、移住のための調査などをしたのではないのでしょうか。明治5年の時点では、物揚場付近は当別移住へのベースキャンプ的な役割を果たしていたのではないかと考えています。



「石狩町当別付近ノ図」（北海道大学附属図書館蔵）の一部。石狩川河口近くに「伊達英橋物揚場」の文字があり、そこから赤い点線（図では星印にしてある）で当別への道が「今般切開ノ新道」として記されている。